

欧州都市のユダヤ人街に関する研究ノート（1） —ヴェネツィア（イタリア）の調査報告—

Research Notes for Jewish quarters of European cities (1) - Reports of Venice (Italy) -

根本 敏行

文化政策学部文化政策学科

Toshiyuki NEMOTO

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural policy and Management

本稿は、欧州の都市におけるユダヤ人街に関する諸問題を取材・研究するもので、同様の一連の研究の一部である。ここでは、ゲットーという言葉の起源となったヴェネツィアのゲットーを取り上げた。ヴェネツィアにおけるユダヤ人の活躍と今日の創造都市論には共通する背景があるものと見ることができる。

This paper is about research issues related to Jewish quarter in European cities, and is part of a series of studies of the same. In this case, I picked up the ghetto of Venice (the origin of the word ghetto). The same background could be observed between the success of Jews in Venice and today's creative city theory.

はじめに — 隔離の場から創造的な場としてのユダヤ人街 —

本稿は、欧州各都市にある、あるいはあったユダヤ人街に関する一連の研究の一部である。筆者がこのテーマに取り組もうと考えたきっかけは、産業遺産研究会での共同調査の中でアウシュヴィッツやワルシャワ、ウッチ（ポーランド）等を訪れたことである。欧州のユダヤ人と聞けば、日本ではナチスによるホロコーストを連想する場合が多い。欧州の産業遺産を研究していると、特に近代においては世界大戦やホロコーストなどいやでもその負の側面に対峙せざるを得ない。しかし、欧州のユダヤ人居住の歴史は古く、時には良き隣人として共生しながら今日に至っている。欧州全域にわたって、さらには世界中にゲットーというユダヤ人居住区の名称が残されている。筆者は、とりわけそのルーツがヴェネツィアにあるということに興味を持った。1720年創業の欧州最古のカフェ（コーヒーハウス）、フローリアンもヴェネツィアにある。18世紀欧州で隆盛したカフェ（コーヒーハウス）は、オリエント地域から持ち込まれた文化を伴っており、それは身分や階級、民族、宗教を問わず自由に交流し情報交換することのできる場を提供し、後の欧州社会の様々な社会システム、市民活動、公共圏（ハーバーマス 1962）のゆりかごになった。イタリアで最初の新聞もフローリアンで発行された。ヴェネツィアは東方貿易、地中海貿易の交易で成り立つ拠点都市としての性格から、多様な人材の活動に寛容だったことがその背景にある。そして、この寛容性こそが創造都市ないしは創造階級と呼ばれる人材の活躍を保障するもの（フロリダ 2008）であり、ユダヤ人の活躍の背景とも重なると考えられる。

欧州には様々な人種、民族が共存しているが、その移動の文化的・宗教的背景や経緯によって居住地は様々である。都市の中に同業者や同郷のコミュニティを形成することも多い。中華街、イタリア人街、インド人街などが各国に展開している。とりわけ商業・金融業などの第3次産業に従事する人々は半ば必然的に都市に居住することになる。また今日では多文化共生や創造都市論など、多様な人種、民

族の定住の問題は、もっぱら「都市の問題」として立ち現れる。

ユダヤ人は、金融業での活躍が抜きん出ている場合が多い。背景には欧州で多数派のキリスト教がこの職業を蔑んできた（その一方で大いに必要としていた）こと、その逆にユダヤ人などよそ者が農業、製造業、商業など他の職業に就くことを制限していたこと、故郷を追われた流浪の民（ディアスポラ）で異教徒の少数派が生き延びるために、個人の才覚に負うところが多く、小規模でも成立して土地に定着しない職業を選んだこともある。金融業に限って言えば、いわば情報を商っているわけで、具体的な商材を扱わないのであるから、一か所に固まっていなければならない必然性はない。しかし、宗教の違いや文化の違いからたびたび地元住民との軋轢を起こし、ユダヤ人居住区に閉じ込められることが広く行われてきた。これが決定的になったのは第2次世界大戦期のナチスによるユダヤ人隔離（そして最後は絶滅）政策である。戦後の欧州では、少なくとも制度上はユダヤ人であることによる居住の制限はなくなっているが、それでも多くの都市でユダヤ人は旧ゲットーなどのユダヤ人街に集まって居住している。そして、こうした一角は、今日では都市の重要な観光の対象であったり、創造的な多文化共生の場となっている様子が見られる。

1. ゲットーの起源

ヴェネツィア市街の北西部カンナレージョ地区にはゲットー・ヌオーヴォ（Ghetto Nuovo: ヴェネツィア方言ではGetto Nuovo）という地名があり、ここが世界中のユダヤ人居住地区、あるいは隔離地区を表すゲットーという言葉の起源である。

ゲットーというのは、鑄造するというイタリア語のジェッターレ（gettare）から変化したヴェネツィア語（getto）で、鑄造所という意味である。古くから居住していたドイツ語圏（神聖ローマ帝国）・中東欧由来のユダヤ人、アシュケナジムのヘブライ語の発音の癖から、ヴェネツィア語のgettoがイタリア語のghettoとなったとされる。

2. ヴェネツィアのユダヤ人

有名なヴェネツィアのユダヤ人としてはシェイクスピアの『ヴェニスの商人』の登場人物、金貸しのシャイロックが一番に挙げられるだろう。これは創作上の人物ではあるが、ヴェネツィアの交易都市としての歴史や文化、宗教的に迫害されつつも金融業などで影響力を持っていたユダヤ人、といった典型的な社会状況をよく物語っている。2004年、マイケル・ラドフォード監督、アル・パチーノ主演で映画化された作品では、シャイロックをめぐるユダヤ人の扱いは、原作のような喜劇的内容ではなく、ユダヤ人差別を描写した悲劇的内容となっている。

ヴェネツィアのユダヤ人は、古い記録では10世紀から、東方貿易でヴェネツィアが勃興してきた12~13世紀頃にかけて定住がはじまったとみられる。が、その数は少なく、欧州のユダヤ人の多くはイスラム支配化のレヴァント地域やスペインに居住していた。

地中海世界におけるユダヤ人は、おおむねイスラム教国が力を持っていた10世紀までとオスマン帝国が最盛期を迎えた15、16世紀頃には比較的自由に行動できていた。イスラム教はユダヤ教とキリスト教を同じ聖典を共有する仲間とみなし、一定の条件のもとではそれぞれの宗教を許容していた。『イスラム政権の下で暮らすユダヤ教徒は、キリスト教徒などととともに被統治者（ズィンミ）とされ、ウマルの法と呼ばれる規則でその地位と身分が定められた。この規則により、ズィンミの生命と財産は守られ、その宗教も、特別の税を払い被統治者としてふさわしくない行動をとらない限り認められた。……初期のイスラム教支配が、ユダヤ人にとっては必ずしも厳しいものでなかったことのもうひとつの理由は、キリスト教支配下のときと違って、ユダヤ教徒がこういった差別の待遇を受ける唯一のグループではなく、ましてや最大のグループでもなかったからである。』（シェイドリン 1998）

その後、16世紀ごろまでには、広範な東西（オリエントと欧州）の交易を背景にユダヤ人を含む多くの外国人がヴェネツィアに居住するようになっていった。ヴェネツィアはもちろんキリスト教国の仲間ではあるが、貿易を主とするその活動は実利的であることを重んじ、時にはキリスト教国にも攻め込むなど、宗教などの原理主義的な縛りについてはかなり融通を効かせていたようである。その結果、ヴェネツィアではユダヤ人に限らず、地中海世界の多くの外国人が居住したり商館を建てたりし活躍することとなった。

後述するように、欧州のユダヤ人は、基本的に銀行、金融業（金貸し）など少数の限定された職業に従事することしか許されていなかったが、銀行や金融業はレヴァント地域やオスマン帝国の諸地域全般の商業において極めて重要で、かつ儲かる職業であった。財力を背景として、ユダヤ人たちは法令の定めによる公の活躍の場だけではなく、法の網の目をくぐるようにして製造業や小売業など他の職業にも進出して大きな影響力を持っていた。逆に、キリスト教徒も、ユダヤ人の能力や目端の利く行動力、金儲けの魅力に期待して、ユダヤ人の銀行に投資したり、ビジネスのパートナーとしたりしていた。

ヴェネツィアのユダヤ人は、その時代と出身地別に3つのコミュニティに分かれていた。もっとも古い第1のグルー

プはアシュケナジム（前述）で、主に金融業者としての地域を固めていた。12、13世紀頃まで、欧州内で徐々に移住してきた人々である。第2のグループは1492年以降に現れたスペインとポルトガルからの亡命者でポネンティニ（西方のイスラム勢力圏であったスペイン・ポルトガル系ユダヤ人：セファルディ系とも）である。多くは商人や医師に専門化しており、言葉や習慣も大きく異なっていた。第3のグループは、16世紀にはじめて現れたレヴァンティニ（レヴァント地域、オスマン帝国など東方イスラム勢力圏からのユダヤ人）で、イスラム勢力の下で「スルタンの臣下」として、法的（表向き）にはキリスト教徒と同様の地位を持ち、貿易を主体としてヴェネツィアには短期間居住するだけであった（マクニール 1974）。

これら3つのユダヤ人コミュニティは個別に組織化されており、後のゲットー内での位置づけも異なっていた。

アシュケナジムは、東方からの貿易品を中西欧に仲介することが主要な役割であった。1385年、ヴェネツィアの上院は市内（潟）で活動を許していたアシュケナジムの金融業者のグループに最初の免許を付与したとあるが、これは画期的なことである。以前から市内では金貸し（利子を取る）は禁じられていたため、市当局は潟ではなく陸側のメストレ地区に限って金貸しを許しており、1382年に市は10~12%の金利を許す契約をメストレの金融業者と結んでいたからである。これら免許により、市内のユダヤ人は後のコミュニティ形成のための基礎を築き、墓地を作るためのリド島の土地も手に入れている。（ウェブサイト7、8）しかし、当局はすぐに金融業のやり方に難癖をつけて1397年には市内の免許の更新を拒否。金融業を営むユダヤ人は、市内（潟）での滞在時間を制限され、上着に黄色い認識票（1500年以降は赤）を縫い付け、帽子をかぶることを義務付けた。この規制は1516年のゲットー発足まで続く。

3. ゲットーの発祥（以下（ウェブサイト10）から筆者が翻訳・加筆して構成）

メストレに居住して限定的に市内で活動するといった制度は、カンブレー同盟戦争（注1）によるヴェネツィアの敗北のあと崩壊した。

1905年にはハプスブルクのマクシミリアンからの脱出や、コネリアーノ、ヴィチエンツァでのドイツ人傭兵の蛮行から逃れてきたユダヤ人避難民がヴェネツィアにあふれたためである。彼らはサン・カッシアーノ、サン・タゴステーノ、サン・ジェレミア、サン・ポーロなどの市内のあらゆる地区に絶え間なく流入し、ミノリテン修道会の不寛容な対応もあり、地元市民との平和的共存は不可能な状態になった。

そこで、平和的に、ユダヤ人を追放する（結果として財力を失う）ことなく問題を解決するために、ゲットーに隔離するという解決策をとったのである。ヴェネツィアに住むユダヤ人全員が、1516年3月29日、ヴェネツィア当局によって制定されたユダヤ人隔離の法によって「ゲットー・ヌオーヴォ（新ゲットー）」に居住することとされた。

新ゲットーが創設された当初は住民の大多数がアシュケナジムで、地元のヴェネツィア（イタリア系）ユダヤ人は

わずかであった。しかしこの後、ポネンティニ、レヴァンティニといった参入者が加わってくる。

ゲットーの語源となった新ゲットーは、当時もはや使われなくなった大砲鑄造工場の跡で、周囲を運河と運河に接する建物の壁で完全に囲まれていた。通常運河に面する部分は建物を少し後退させて歩道・船着き場が設けられる場合が多いが、ここでは周囲をぐるりと壁が囲んでいる。新ゲットーという地名は、ゲットーとして新しいということではなく、旧鑄造所（ゲットー・ヴェッキオ：旧ゲットー）の近くに作られた、ヴェネツィアで２番目の「新鑄造所」という名称からきている。

十字軍への支援など、商船だけではなく軍艦も多数建造していたヴェネツィアは１６世紀ごろには造船・兵器製造の一大拠点となっており、大砲の鑄造所もあったわけ、軍事機密でもある鑄造所は運河で囲まれた独立した島（ジュデッカ島）として存在していた。

新ゲットーは、周囲を囲む建物の外側の窓は全て煉瓦で塞ぎ、棟間も高い塀で塞がれ、東西ベルリンの境界線のようにであった。設立当初の新ゲットーの人口は、イタリア系ユダヤ人とアシュケナジムで７００人ほどとされる。当時若干の店子が存在していたが、ユダヤ人の入居のために退去を余儀なくされた。

ここは鑄造所跡というだけではなく、刑務所と処刑された犯罪人の埋葬を担っていたサン・ジローラモの僧院の近くでもあり、今日という都市の迷惑施設ということになる。

隔離といっても完全隔離ではなく、夜間の出入りを禁じられていた。出入り口は２つの門に限られ、一つは旧ゲットーとの間の「ゲットー運河」の橋の上、もう一つはその反対側の「サン・ジローラモ運河」の橋の上に設けられた。朝はサン・マルコ広場のマランゴーナの鐘で開門し、夜半には４人のキリスト教徒によって閉じられ、周囲の運河にはキリスト教徒の警護の船が出て監視していた。この経費も当局の定める基準によってユダヤ人によって購われていた。

ゲットーが作られてすぐ、アシュケナジム、あるいはいわゆる「ドイツ人（nazione tedesca）：神聖ローマ帝国からのユダヤ人」の身分が定められた。ヴェネツィア治安判事 Cattaver（公共財産として管理されるべき富の回復に責任を持つ）の直接かつ厳格な管理の下で、彼らはゲットー融資銀行を運営し、重い年次税を支払うことを要求された。また金融以外では、中古衣類を扱う Strazzaria などの中古品の商い（質屋としても機能したとみられる）に限定された。そのほか医師とヘブライ語の文書を印刷するごく少数の仕事が例外として許されていた。医師が例外とされていたのは、ユダヤ人の高い教育水準とアラブ言語に通じていたことが背景にある。当時は医学も科学も東方アラブ世界が欧州を凌駕していたからである。

居住や職業の制限だけではなく、ユダヤ人とわかるような服装や認識票を衣服に付けることなどが義務付けられていたが、一方で信仰の自由や戦時下の保護は約束されていた。

4. ゲットーの展開

新ゲットーが手狭になったこともあり、１５３８年には隣接する旧鑄造所跡にもユダヤ人の居住が認められ、１５４１年にはレヴァンティニのための居住地として指定され、「旧

ゲットー」（Ghetto Vecchio）と呼ばれるようになる。新旧の形容詞は、ゲットー建設前の鑄造所についてのことであり、ゲットーとしての成立は新ゲットーの方が旧ゲットーより古い。

彼等は、オスマン帝国から来た商人と、１４９２にイベリア半島から追放されたユダヤ人とからなるかなり裕福なグループであった。彼らは豪華な衣服を纏い、男性はターバン、女性は高価な宝飾品や宝石で飾られた背の高い帽子を身に着け、地味なアシュケナジムとは大きく異なっていた。

トルコとの戦争（１５３７年から１５４０年）の直後、アンコーナ港との競争でヴェネツィアの東方貿易は急激に落ち込み、深刻な経済的困難に直面していたため、レヴァンティニの流入はヴェネツィア貿易当局にとって干天の慈雨といってもよい存在であった。

そこで旧ゲットーはアシュケナジムが多い新ゲットーと異なり、庭園や居住空間を含むように拡張され、ユダヤ人としての規制も新ゲットーのそれと異なっていた。衣服に識別票をつける必要こそあったが、職業は金融と中古取引に限定されなかった。

レヴァンティニなどイスラム圏ユダヤ人は東方貿易ではヴェネツィアのライバルであったので、初めヴェネツィア共和国はイスラム圏ユダヤ人の商品の運搬を自国船に禁止していた。しかし後にこれが解禁され、更にローマ教皇が宿敵のイスラム教徒との交易を禁止するようになるとヴェネツィア共和国にとってイスラム圏ユダヤ人との交易が重要なものになった。そのため、やがて彼らのヴェネツィア共和国国内での居住も認められるようになった（徳永１９９７）。

当初、貿易で出入りの激しいレヴァンティニはゲットー内での滞在時間は相対的に短かく（最初は４か月で、後に２年まで延長）、レヴァンティニが家族と一緒に居住できるようになるまでかなりの期間が必要であった。

１５８９年には、ポネンティニの流入によってヴェネツィアのゲットーはその最終形態に至る。彼らは、イベリア半島におけるレコンキスタ（キリスト教国のイスラム教国への再征服）の後の１４９２年から１６世紀にかけてスペイン（カスティーリャ王国やアラゴン王国）やポルトガル王国で異端審問が激化したため、モロッコなどを經由してヴェネツィアへ逃れてきていたユダヤ人である。

中心広場の周辺には貸付銀行や中古衣料の店、さまざまなシナゴークが集積し、背の高い狭い間口の建物と、レヴァンティニの所有する優雅な邸宅とが混じり合う。新ゲットーの限られた空間はすぐに手狭になり（住民一人あたり２平米にしかない）建物内は細かく板壁で仕切られ、さらに高層階が追加された。中には９階を超えるものもあり、さながら１６世紀の摩天楼といった状況となった。

各国別のグループは独自のシナゴークを建設した。外観は慎重に目立たないようにデザインされたが、内装は各国別グループが競って豪華な装飾を施した。

数々の経済・財政上の制約にもかかわらず、ユダヤ人のコミュニティはヴェネツィア共和国の商業においてますます重要な役割を果たし、ゲットーは、ユダヤ人住民や訪問者のためだけでなく、毎朝開門と同時に流れ込む多数のキリスト教徒にとっても、ヴェネツィアの貿易・商業の中心地となった。

16世紀の後半にはイタリア起源のユダヤ人の小グループが形成された。彼らは中央および南イタリア、とりわけローマから流入してきた。1575年には、新ゲットー広場の現老人ホームの前に自分たちのスコラ（教学館:Scola Italiana）を建築した。

1630年のペスト大流行の前の最盛期にはゲットーの人口は5,000人に達した。住民の職業は商業、金融、医師、船員、外交関係、通訳などが多かった。ゲットーに閉じ込められてはいたものの、裕福なユダヤ人は贅沢に暮らしており、地区のリーダーはしばしば富の誇示や賭博の蔓延を規制しなければならなかった。

ペスト禍でヴェネツィアは人口約15万人のうち5万人を失い、経済的にも大打撃を受けた。隔離されてユダヤ教の教義に基づいた衛生対策が施されていたゲットーも例外ではなく、多くの犠牲者を出した。しかしゲットーは、コサック虐殺を逃れてきた東欧難民の流入により、人口は比較的早く回復した。

その後1633年には、豊かなレヴァンティネとセファルディの家族のために住宅を提供するために、「新ゲットー」と聖ジローラモ教区の「旧ゲットー」（ゲットー・ヴェッキオ）に隣接して、聖エルマコーラ（Ermacora）と聖フォルトゥナート（fortunato）あるいはサン・マルクオーラ（San Marcuola）教区に、第3のゲットーとして「最新ゲットー」（ゲットー・ヌオヴィッシモ）が追加された。

当局は、ヴェネツィア経済に新たな弾みをつけたいという動機で、レヴァンティネやポネンティニ（セファルディ）のより豊かなユダヤ人が市内に贅沢な住居を構えられるようにする政策をとった。

しかし、彼らの富も、トレ・ヴェスやヴィ・ヴァンテスの艦隊も、ヴェネツィアの運命を変えるには十分ではなかった。ヴェネツィアは、トルコとの戦争によって打撃を受け、徐々に国際貿易の中心から周辺へと追い込まれ、さらに新大陸の発見によって国際貿易が地中海から大西洋にシフトしてからは凋落していった。

ゲットー内には、さまざまなユダヤ人の出身地や大学に由来する名前の付いた小さなコミュニティが形成され、各々が自立して自律的に運営された。各グループは、独自の風習や習慣や、独自の宗教的伝統に応じて暮らしていた。この間（17世紀初頭から17世紀）、これらの地区にはシナゴグやスコラ（教学館）が多数建設された。これらはこの地で宗教の自由を得て定住している民族グループごとに分かれており、ドイツと広東（カントン）スコラはアシュケナジム式、イタリア・スコラはイタリア式、レヴァントとスペイン・スコラはセファルディ式であった。

数々の迫害や軋轢があっても、ユダヤ人はヴェネツィアで栄え、ヴェネツィアの東方貿易の主役はユダヤ人だったといってもよいほどの活躍をした。「ヴェニス商人」のシャイロックのような金貸しばかりだったわけではないのである。各地でユダヤ人（ユダヤ商人）が裕福であることは知れ渡り、ユダヤ人の乗ったヴェネツィア商船はオスマン帝国や聖ヨハネ騎士団に襲われ、ユダヤ人を誘拐して身代金を要求した。ヴェネツィアのユダヤ人コミュニティは、言われるままにお金を支払う事が多かった。これに対してレヴァンティニやスポンティニが中心となってオスマン帝国との交渉のための特別機関を設け、聖ヨハネ騎士団の本

拠地マルタ島には代理人を置いた。代理人の仕事はユダヤ人が捕まった場合にヴェネツィアのユダヤ人コミュニティに報告し、もし身代金が支払い可能ならばその手続きをすることであった（徳永1997）。

ユダヤ人隔離地区としてのゲットーは、ヴェネツィア共和国崩壊の1797年までの3世紀の間存在した。1979年、共和国崩壊時にナポレオンによってユダヤ人隔離政策が終了し、ユダヤ人はもはやゲットーに居住することを強制されなくなった。ヴェネツィアはこの後フランス帝国やオーストリア帝国の領有を経て、イタリア統一国家イタリア王国の領土となった。だが、イタリア統一運動にはゲットーから解放されたユダヤ人たちの協力があつたこともあり、1866年に初代イタリア国王となったヴィットーリオ・エマヌエーレII世は改めてユダヤ人に居住の自由を認めた。

しかし、移転するための資金がないなど、解放後もゲットーに留まったユダヤ人は多い。

5. 今日のゲットー境界

今日でも、住宅やスコラ、シナゴグなどゲットーの歴史を偲ばせる特徴的な建物群は、その後の度重なる迫害を潜り抜けて原型を保っており、この地区の重要な文化財となっている。

中心のゲットー・ヌオーヴォ広場にはユダヤ博物館など関連施設が建つが、目を引くのはナチスのホロコーストのメモリアル（追悼碑）である黒いレリーフ群である。

イタリアのファシスト政権は、当初あまりユダヤ人迫害を行わなかった。しかし、同盟を組んだナチス・ドイツの影響が徐々に及び、1938年、ファシスト政権の人種法の公布によってユダヤ人の市民権が奪われ、ナチス・ドイツとの連携によりナチスによる迫害が始まった。1931年に1,814人だった居住者は1938年には1,200人に減少した。その後、ドイツ占領軍の到着とともに状況は悪化、1943年9月8日から1945年4月までに、高齢者やほとんど盲目のチーフ・ラビのアドルフォ・オットレンギ（Adolfo Ottolenghi）を含む248人のユダヤ人がヴェネツィアから収容所に強制移送されて（ゲットーのユダヤ人の約5分の1）、最終的に絶滅収容所から生還できたのはわずか8人であった。

ファシズム期のユダヤ人迫害について、（文献6）（ジョンソン1999）から引用する。

『ファシスト体制下の1938年に始まった市民権剥奪などの反ユダヤ措置で、すでに公職を追放されるなどの迫害を受けていたユダヤ人は、1943年の休戦以降、アウシュヴィッツやダッハウなどの絶滅収容所に送られ、過酷な運命をたどった。この時期、「ナチファシスト」に身柄を拘束され、ナチス・ドイツ下の収容所に送られたイタリア在住のユダヤ人約7800人のうち、生きながらえたのは1000人にも満たないという。... こうしたイタリア国内でのナチス・ドイツの作戦には、サロ共和国のファシストが手を貸していた。』



ゲットー・ヌオーヴォ広場にあるホロコーストのメモリアル碑。



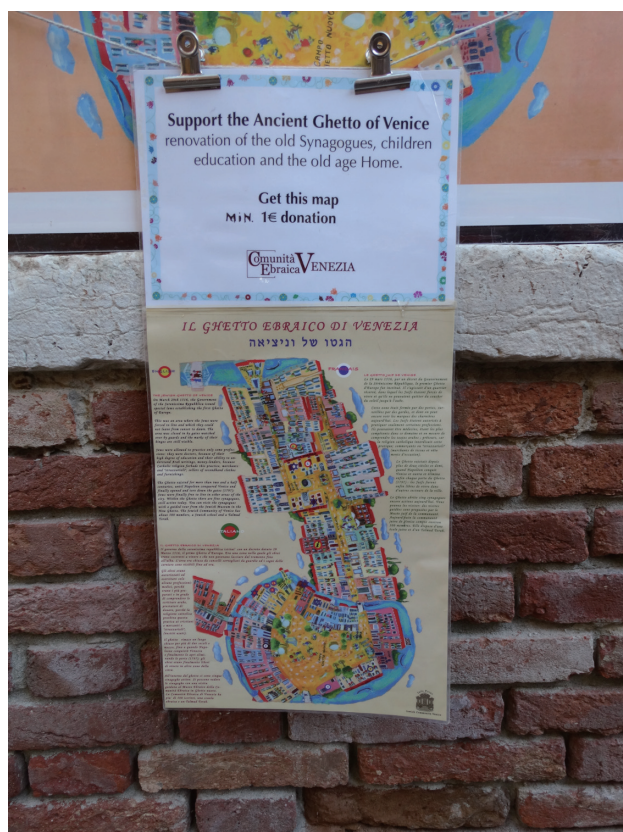
同拡大図：収容所送致のため貨物列車に積み込まれる情景。



ユダヤ人コミュニティの観光案内所。市当局の物とは別。



広場の様子：黒い帽子と服の男性が見られる。黒づくめの服装はユダヤ教の中でも正統派のハッシディズム派（敬虔派）で、現代においても厳格に律法を実践しているグループ。



同案内所で販売している観光マップ（英語付）。売り上げは地域活動に。



旧ゲットー通りにあるコーシャー（注3）のユダヤ・レストラン。

※：写真は全て筆者撮影（2014年8月18日）

6. ゲットーの文化

ヴェネツィアのゲットーは、その3世紀にわたる歴史において、単にユダヤ人を隔離した地区であるというだけではなく、イタリアの、そして欧州全体の社会と文化に大きな役割を果たしてきた。

ヴェネツィア共和国は、ユダヤ人に高利貸しや古着販売（estrassaria）以外に医療に従事することを認めていた。15世紀以来、ユダヤ人がパドヴァ大学で医学を勉強する権利を与えており、口頭での信仰の誓いやユダヤ人の認識票の着用を免除されていた。多くの若いユダヤ人が医学の研鑽に励み、非常に優秀な成績を収めた。

1516年のゲットー閉鎖のおり、閉門後、夜間にキリスト教徒を診ることができなくなり、わずか数か月後の1516年7月には、ユダヤ人の医師は、他のユダヤ人に禁止されている時間帯にも外出できるよう公式の法が施行された。ただし、訪問先と患者の正確な情報を提示するという条件付きである。

ゲットーからは、医師以外にも文学や学問の領域で優れた人材を多数輩出した。

また、ゲットーの内部では信仰や勉強（シナゴグとスコラ）だけではなく、劇場や音楽アカデミーや文学サロンもあった。旧ゲットーのメイン街路では、カンピエッロデッレスコーレの書店のほかあらゆる日常用品を販売する店が並んでいた。レヴァンティナ・スクオーラには24室のホテルが、バルッキ宮殿には旅館や病院もあった。ゲットーは、ペスト大流行の1630年～1631年以前には、繁栄する「都市内都市」であった。

ユダヤ人がゲットーに閉じ込められたのと同じ年に（1516）ユダヤ人の印刷業が勃興し、16世紀～17世紀初頭には、ユダヤ人地区では出版・印刷業が盛んになる。

この時期、国際貿易の拠点都市であったヴェネツィアは、欧州有数の出版・印刷の中心地ともなる。ユダヤ人のタルムード（ヘブライ語）やコーラン（アラビア語）の印刷から始まり、あらゆるジャンルの活字印刷で栄え、16世紀前半には、当時欧州全域で出版された本の約半数がヴェネツィアで印刷されていた。特に出版点数が多かったのは軍事関係、医学書、そして楽譜、料理書、美容書といった実用書の類であった（マーニョ 2012）。高邁な哲学や文学よりも実利を重んじるあたり、ヴェネツィアらしさが反映しているように見える。

15世紀終盤以来、国際的な印刷の中心となったヴェネツィアには、ドイツから自国を追われた優秀な印刷工が定住し、自分のビジネスを起業するのではなくダニエル・ボンベルグの下で働いた。ボンベルグはアントワープ出身の企業家で、ヴェネツィアのユダヤ人の印刷業を興し、ヘブライ語のテキストの出版では最も有名なキリスト教徒である。

ボンベルグは、さまざまな祈祷書だけでなく、バビロニアとパレスチナのタルムードの完全版と、メジャーとマイナーの解説付きのラビ聖書の3つのエディションを発表した。

ボンベルグがこれらの仕事から退出した後、他の出版業者はヘブライ語の印刷を続け、マルコ・アントニオ、ジュスティニアニ、アルヴィーゼ・ブラガディン、ジョヴァンニ・ディ・ガーラなどが激しく競い合った。ジュスティニアニとブラガディン間の商業紛争は、ローマ教皇庁に

よって、神に対する冒瀆に満ちた行為、例えばタルムード、すなわち異端のテキストを出版したとこととしての告発に転化される。

1553年8月12日、教皇ユリウスⅡ世は、タルムードの焚書を、続く10月21日土曜日には10人委員会の命により、タルムードにかかるすべての書籍はサン・マルコ広場の『大焚書』に投じられた。そしてその他のヘブライ語の本も1568年に焼却された。後にヘブライ語の書籍の出版が再び許可されるが、16世紀中はずっと、全てのヘブライ語のテキストは検閲の下に置かれた。

これによってヴェネツィアの印刷業は衰退し、アムステルダムなど他都市の機械印刷が世界をリードするようになった。

ゲットーはユダヤ人を隔離する一方で、見方を変えれば外部から遮断して強固なコミュニティを維持するための防壁ともなる得る。実際、ゲットーの中では相当程度に自由闊達な身分の社会での文化活動が開いていた。これらのユダヤ人が担い手となって、東西のあらゆる人知を集約した出版や図書販売流通の拠点が形成され、先端的な医学などが発展したということは、今日の創造都市論でフロリダが提唱した創造的人材を示す指標となる「3つのT」(Talent: 才能, Technology: 技術, Tolerance: 寛容)がこの時代のヴェネツィアのユダヤ人コミュニティの活躍の背景となっていたものと見ることはできるのではないだろうか。

500年に及ぶ歴史を持つユダヤ人地区は、5つのシナゴグ、ユダヤ博物館のほか、ホロコーストの祈念碑、さらにコーシャー・フードのレストランなど、独自の宗教的伝統、文化遺産を継承する一方、これらの文化遺産によって多くの観光客をも引き付けている。居住や職業の自由を得たユダヤ人が、そのアイデンティティを保ちながらも生き生きと活躍することで、「水の都」ヴェネツィアは、その独特の景観以上に歴史や文化の深みを持った魅力的な観光地、居住地としての輝きを増している。

ヴェネツィアのユダヤ人の存在と活躍は、ゲットーという名を遺したということ以上に、21世紀に求められる都市における多文化共生や、創造産業の振興にとって、普遍的かつ重要な示唆を与えていると言ってよいであろう。

注

- 1) カンブレ同盟戦争：
イタリア戦争（1494～1559年）の中心的な戦争で、1508年～1516年に行われたヴェネツィア共和国をめぐる戦い。教皇、フランス、スペイン、神聖ローマ帝国、イングランド王国、ミラノ公国、フィレンツェ、フェラーラ公国、スイスが参戦。1508年にカンブレ同盟（the League of Cambrai）が結ばれ、1510年に神聖同盟（the Holy League）が結ばれて、1516年のノワイヨン条約（the Treaty of Noyon）により終結。
- 2) イタリア戦争：
小国家に分裂していたイタリアの支配権をめぐる行われた、ヨーロッパの大国同士の戦い（1494～1559年）。
- 3) コーシャー・フード：
コーシャ（Kosher）とは、ユダヤ教で定める食べ物に関する規定のこと。食べ物と言っても現代の社会

においてはそれが広く、一般的に人が口にするものを意味するので、薬、サプリメント、調味料、その他の食品などもその範疇に入る。そのままでもコーシャである食品は自然の産物である、魚（限られた種類）、特殊な屠殺のみによる牛肉、羊、鳥肉など、野菜、果物その他であるが、加工される物に関してはその製造過程で混ざり物、身体に安全でないものなどが入らないように、厳しく管理されて加工されたもののみがコーシャの食品として認められる。（日本ユダヤ教団のウェブサイト <http://www.jccjapan.or.jp/1246712540124711251512540.html> より）

参考図書・ウェブサイト

- 1) コルゲン・ハーバーマス 細谷貞雄、山田正行：訳『公共性の構造転換』 1994 年（原著：1962 年）
- 2) リチャード・フロリダ 井口典夫：訳『クリエイティブ都市論—創造性は居心地のよい場所を求める』 2009 年（原著：2008 年）
- 3) レイモンド・P・シェインドリン 『物語 ユダヤ人の歴史』 入江規夫 訳 2003 年 中央公論新社（原著：1998 年 Macmillan USA）
- 4) ウィリアム・H・マクニール 『ヴェネツィア -東西ヨーロッパのかなめ 1081-1797-』 清水廣一郎 訳 1979 年 岩波現代選書（原著：1974 年 シカゴ大学）
- 5) 徳永恂著、『ヴェネスのゲッターにて 反ユダヤ主義思想史への旅』 1997 年 みすず書房
- 6) ポール・ジョンソン著 『ユダヤ人の歴史 上巻』 石田友雄監修 阿川尚之・池田潤・山田恵子訳 1999 年
- 7) アレッサンドロ・マルツォ・マーニョ著『そのとき、本が生まれた』 清水由貴子訳 柏書房、2013 年（原著：2012 年 イタリア）
- 8) 北村暁夫 伊藤武 編著 『近代イタリアの歴史 -6世紀から現代まで-』 ミネルヴァ書房 2012 年
- 9) The Jewish Museum of Venice <http://www.museoebraico.it/>
- 10) Jewish Community Venice <http://www.jvenice.org>

